



わたしの数学史

作家

中千夏

私がまともに学校へ行ったのは、小学校の4年くらいまでだ。5年生あたりで「名子役」のホマレ高くなってしまって、どんどん芸能界に引っ張られ、舞台を中心に、テレビ、ラジオと仕事が途切れたことがなかった。

おかげで遅刻、早退、欠席の常習犯。いつも必要出席日数ぎりぎり、なんとかかんとか進級した。曲がりなりにも高校まで卒業することができたのは、一重に担任の先生方のご愛顧のおかげだ。

私は本当に担任の先生に恵まれた。小学校、中学校の先生は、授業の遅れを補うために、よく楽屋まで補習に出向いてくれた。高校の先生はなにくれとなく応援をしてくれた。銀座の泰明小学校での担任は、戦前から教師をしていた女性で、生徒とともに空襲を受けた時の傷跡が大きく残り、それを隠すために、いつも白い包帯を腕に巻いていた。中学の担任は、あろうことか数学教師であった。

小学校の時から「数」は私の天敵だった。これには、2つの理由がある。第1は当然、私の素質だ。数学的素質がものすごくあれば、どんな逆境にもめげず、私は数学に遭進しただろう。

第2は母。どういうわけか母は数学的素質に恵まれており、それがいまだに自慢の種だ。なんでも、女学校の頃、「仮に赤道が帯だとして1m伸びたら、どのくらい地面から離れるか」という問題を出されて、即、手を挙げた2人の生徒の1人だった、というのだから、自慢するのも無理はない。

そんな母は、自分の娘が、ほかの科目はすべて百

点取ってくるのに、算数だけは、よくて90点台であることを非常に歯がゆがり、なじった。90点取れば立派なもんじゃん、と今は思えるが、小さな頃は萎縮した。数を見たり聞いたりするだけで、おろおろした。

これに対する母の金切り声が、私を、ますます数嫌いにしたことは確実だと思う。

そんな者が学校を休み休み、数学の授業についていけないわけがない。大阪から東京に転校した5年生の末期には、3か月もブランクがあったので、あらゆる成績が転落したが、中でも、算数の転落ぶりは見事だった。

そのまま中学になだれこんだ。明石中学（今は名前が変わった）の担任、数学の先生は、そんな私をよく助けてくださった。高校受験できたのは、まさに先生の努力のたまものだ。しかも、入学後の噂では、入試の時の私の数学の成績は、ほとんど完璧だったらしい。逆に、得意だと思っていた英語がさほどでもなかったらしいから、試験というのは水物だ。

だが、入ってしまえばもとのもくあみ。数学教師が入試を見ていたとすれば、後で、さぞかし落胆したことだろう。

麴町女学校高等部の数学の先生は、眼鏡をかけた元気な女性だった。私は、彼女に嫌われた。成績が悪い上に、態度が悪かったから当然だ。当時、私はいろいろ悩むところがあって、ちょっとニヒルになっていた。それが、時に、先生の顔をちゃんと見て挨拶しない、というふうな態度になった。私の進級に大反対する彼女を、必死でなだめてくれたのは、担任の国語の先生だった、と聞いている。

数アレルギーから抜けたのは、40を迎える頃だったろうか。いまだに計算が不得手ではあるが、数の世界に興味はある。私が、数式のいっぱい出てくる本を面白がって読んでいる、と聞いたら、先生たちは、どんな顔するだろう。